青年期の孫－祖父母のコミュニケーションと祖父母機能

The influence adolescent grandchildren-and-grandparents communication on grandparenting functions.

田中真理[1,2]・鎌田晶子[3]・秋山美栄子[3]
Mari TANAKA, Akiko KAMADA, Mieko AKIYAMA

要旨：本研究の目的は，青年期の孫－祖父母とのコミュニケーションの特徴と孫からみた祖父母機能との関連について検討することであった。対象者は短期大学生・大学生 197 名（18.90±.77 歳）であった。孫から祖父母への自己開示と祖父母からの自己開示を組み合わせたクラスター分析の結果，いずれの自己開示も高い両高群，祖父母からの自己開示が高い祖父母開示高群，祖父母からの自己開示が低い祖父母開示低群，いずれの自己開示も低い両低群の 4 群が抽出された。これら 4 群と祖父母機能（存在受容機能，時間的展望促進機能（未来），日常的・情緒的援助機能，時間的展望促進機能（過去））との関連について，孫と祖父母との関係・親と祖父母との関係を共変量とした共分散分析を実施した。その結果すべての祖父母機能において群の主効果が有意となり，両高群が他の群に比べて祖父母機能得点が高かった。以上のことから，祖父母機能には孫と祖父母の双方向のコミュニケーションが重要であることが示された。

キーワード：祖父母－孫関係　自己開示　会話　世代間交流　世代間相互作用

問題と目的

高齢者の長命化や健康寿命の伸長によって祖父母として過ごす期間が長期化している。また女性の社会進出やひとり親世帯の増加，仕事のグローバル化などによって，祖父母が次世代育成に果たす役割への期待も国際的に高まっており（Buchanan & Rotkirch, 2018），祖父母役割は個人にとっても社会にとっても関心の高いテーマといえる。

村山（2009）は高齢者との交流が児童期の子どもに与える影響について検討し，高齢者との交流が共感性や高齢者イメージ，援助行動といった子どもの対人認知や行動の発達に影響することを報告している。さらに，高齢者への親密感を高めるには交流頻度や会話の多様性といったコミュニケーションを通じた交流が重要であり，その場と時間の確保の必要性を指摘している。孫にとって祖父母は最も身近な高齢者であることは，この調査で 9 割以上の児童が思い浮かべる高齢者に自分の祖父母を選択していたことからも明らかである。

孫と祖父母の関係は短期間で構築されるのではなく，幼少期からの交流や関わりを通じて時間をかけながら累積的に培われていくものである。杉井（2006）によると，孫の年齢

1　鹿児島県立短期大学生活科学科
2　文教大学生活科学研究所客員研究員
3　文教大学大学院人間科学研究科

が低いほど祖父母で行動を共にする頻度が高く，情緒的にも金銭的にも緊密な関係を築いている。さらに中学生になると反発的な関係となるが，大学生になると祖父母の老いや人生，世代継承について考えるようになり，祖父母を客観的にかつポジティブに認識することができるようになるという。渡辺（2008）も孫の成長に従い関わりの頻度は減少していくが，大学生では関わりの質が向上することを示している。大学生では半年に1回以上の連絡・会う頻度を保つことで祖父母機能が維持されるとの報告や（野中・奥野，2022）成人した孫では祖父母の交流手段が対面から非対面へと変化させていること（Sciplino & Kinshott，2019）からも，幼少期の祖父母との関係性の強さは，成長と共に交流手段や頻度を変化させながら，その後の祖父母との関係を継続させていると考えられる（e.g., Geurts, et. al., 2011）。

近年，日本では核家族化や都市化が進み，三世代同居家族の減少によって家族内の祖父母と孫の交流機会が減り，交流やコミュニケーションの場を確保することは困難になってきている。一方で，別居している孫の方が同居している孫よりも祖母に対して親近感を持つことが示唆されており（杉井，2006），必ずしも頻繁で密接な交流を持てばよいというわけではないようである。孫と祖父母との関係の質を左右する要因について詳細に検討する必要がある。

Kivnick（1983）は高齢者の人生にとって祖父母であることの意味（祖父母性）が重要であるとし，多次元的な祖父母性（grandparenthood）の概念を整理している。そして祖父母性として，祖父母の生活の中心的としての祖父母性，伝統を受け継ぎその役割で評価されること，一族や家族の永続性（不滅性），過去の追体験と自分の祖父母への同一化，孫に対する寛容さ，という多様な側面を提示している。さらに祖父母性に関する尺度開発も行われており，より実証的な祖父母と孫との関係についての研究が蓄積されている。孫と祖父母の関係性を評価する概念に祖父母機能がある。田畑・星野・佐藤他（1996）は，Kivnick（1983）をベースに，中学生から大学生の孫と祖父母の双方の立場から孫と祖父母の関係性を孫視点と祖父母視点でそれぞれ評価する尺度を開発している。孫・祖父母関係評価尺度（孫版）では孫から見た祖父母機能として，祖父母がいるだけで孫が安心できたり困ったときの拠り所になるというBEINGとしての「存在受容機能」，孫のことを理解しようとしたり大目にみるなどの「日常的・情緒的援助機能」，祖父母の姿を通して孫が一生や死について積極的に考える機会を持つ「時間的展望促進機能」，祖父母の姿から孫が祖父母や両親から引き継いだ類似性を認識する「世代継承性促進機能」の4機能が報告されている。前原・金城・稲谷（2000）では，大学生を対象にした予備調査から作成した質問項目を用いて，高校生を対象に祖父母機能を検討し，「語り部・伝統文化伝承機能」「安全基地機能」「人生観・死生観促進機能」の3機能を見出している。福江・荒井・福岡（2019）は田畑他（1996）の孫・祖父母関係評価尺度（孫版）を一部改変した杉井（2009）を用い，大学生を対象に「導き」「気遣い」「世代的つながり」「世話」「金銭的援助」を示した。このように祖父母性は祖父母のみならず，孫にとっても多面的な意味合いを持つことが明らかにされている。

祖父母性の象徴としての祖父母機能は，孫の発達にも影響することがわかっている。祖父母機能は大学生の一般的な高齢者イメージの肯定化といった高齢者観のみならず，自尊感情や自我同一性といった心理発達にポジティブな影響を及ぼし（福江・福岡・荒井，

2020），田畑他（1996）の時間的展望促進機能と類似した「人生の指針」が女子大学生の自己受容や自尊感情に影響するなど（森下・上田，2016），青年期の孫の自己形成やアイデンティティの発達にも寄与していた。祖父母機能は，幼少期からの接触や会話，共有経験の頻度（Geurts, et. al., 2011；柴田，2015），幼少期からの累積的な交流や関係の質（田中・鎌田・秋山，2022）などが関わっている。特に大学生の孫では，祖父母への自己開示が存在受容機能や時間的展望促進機能に影響することが示され，コミュニケーションの量よりも質的側面の重要性が指摘されている（田中他, 2022）。孫と祖父母の関係性とコミュニケーションでは会話の頻度や内容についての検討がなされているものの（村山，2009），孫と祖父母の対話のバランスや深さといった相互作用をとりあげた研究は少なく，孫と祖父母の双方向のコミュニケーションを考慮した検討は十分ではない。そこで本研究では，青年期の孫と祖父母のコミュニケーションの指標として自己開示を取り上げる。自己開示とは，他者が知覚しうるように自分自身をあらわにする行為（榎本，1987）であり，開示者が自己開示することで非開示者も自己開示するという相互性が知られている（榎本，1983）。さらに，双方の親密性が高くなるほど，自己開示は深まるとされる（丹羽・丸野，2010）。そこで本研究では，孫と祖父母の相互の自己開示量の特徴と祖父母機能との関連について孫の視点から検討を行う。

方　法

調査対象者と調査手続き

九州地方の短期大学生・大学生 221 名を対象に web 上の質問紙調査を実施した。調査時期は 2022 年 10 月であった。調査に先立ち，調査依頼状ならびに web 上の質問紙の冒頭に，研究趣旨と倫理的配慮について説明する文章を記載した。具体的には，研究協力は任意であること，協力しないことによって何らかの不利益を被らないこと，データは数値化され統計的に処理されるため誰がどのように回答したかについて特定されることがないことを記し，回答の提出をもって調査協力に同意したとみなした。なお本研究は鹿児島県立短期大学研究倫理審査部会の承認を得て行われた（承認番号：2022-07）。

調査項目

個人属性　年齢，性別（男性・女性・回答したくない），学年について回答を求めた。

影響を受けた祖父母　福江・福岡・荒井（2020）を参考に，自分の成長にあたって最も影響を受けたと感じている祖父母を一人選択するように求めた。回答選択肢は父方祖父・父方祖母・母方祖父・母方祖母であった。なお，これ以降の祖父母に関する設問にはここで選択した祖父母について回答するよう求めた。また，その祖父母の現在の状況　（「元気に暮らしている」,「元気とは言えないが存命である」,「現在は亡くなっている」）と祖父母の年齢（「60 歳代」,「70 歳代」,「80 歳代」,「90 歳以上」,「わからない」）についても回答を求めた。

祖父母機能　田畑他（1996）の祖父母関係評価尺度［孫版］を用いた。この尺度では，孫から見た祖父母の機能として，祖父母がいるだけで孫が安心できたり困ったときの拠り所になるという「存在受容機能」8 項目，孫のことを理解しようとしたり大目にみるなどの「日常的・日常的・情緒的援助機能」6 項目，祖父母の姿を通して孫が一生や死について積極的に考える機会を持つ「時間的展望促進機能」8 項目，祖父母の姿から孫が祖父母

や両親から引き継いだ類似性を認識する「世代継承性促進機能」4 項目の計 26 項目に対して「1：いいえ」,「2：どちらでもない」,「3：はい」の 3 件法で回答を求めた。祖父母が亡くなっている場合でも祖父母機能の因子の再現性が確認されていることから（中里，2006），亡くなっている場合は存命中を思い出しながら回答するよう求めた。

祖父母との交流　現在の祖父母との同別居状況，主なコミュニケーション手段，対面交流頻度，非対面交流頻度，共同行動について回答を求めた。同別居状況は，「同居」,「所要時間 30 分以内」,「所要時間 1 時間以内」,「所要時間 1 時間以上」の選択肢の中から当てはまるものを一つ選択してもらった。主なコミュニケーション手段では，「直接会って話す」,「電話」,「メール」,「手紙」からの選択肢の中から当てはまるものを複数選択してもらった。対面交流頻度と非対面交流頻度では,「ほぼ毎日」,「週 1 ～ 2 回」,「月 1 ～ 2 回」,「半年に 1 ～ 2 回」,「年に 1 ～ 2 回」,「ほとんどない」の選択肢の中から当てはまるものをそれぞれ一つ選択してもらった。共同行動は，Eisenberg（1988）の祖父母と孫の活動リストと中年期夫婦を対象とした石盛・小杉・清水他（2017）の共行動リストを参考に「買い物」,「食事」,「旅行」,「家事や手伝い」の 4 項目についてそれぞれ「1：ほとんどない」から「4：よくある」の 4 件法で回答を求めた。また COVID-19 の感染拡大によって祖父母との交流に変化があったかについて，感染拡大前後で「交流は減った」,「交流に変化はなかった」,「交流は増えた」の選択肢から当てはまるものを一つ選択してもらった。

自己開示　祖父母から孫への自己開示（祖父母からの自己開示），そして祖父母への自己開示の双方の自己開示の頻度を測定するため，伊藤・相良（2012）や菅沼（1997）の高齢者を対象にした自己開示に関わる項目と久保（1993）の関係の親密さを測定する指標の一つである行動の多様性のうち話題内容に関する項目を参考に項目を選定した。「趣味や活動」「腹が立つ・疑問に思うこと」「嬉しい・楽しいこと」「悩んでいる・困っていること」「将来・今後のこと」「健康」「家計（お金）」「過去の経験」「願望ややりたいこと」「家族のこと」「生き方」「日常の知恵」の 12 項目を用いた。これらの項目に関して，祖父母からの自己開示と，祖父母への自己開示の2つの側面についてそれぞれ「1：まず話さない」から「4：よく話す」まで 4 件法で回答を求めた。祖父母との会話内容や方向性について，大谷・松木（1995）を用いて「あいさつ程度」「世間話程度」「一方的に話す／聞く」「お互いに話す／相談相手」から一つ選択してもらった。

祖父母との関係　祖父母との交流と，孫の祖父母や高齢者への評価には，祖父母に対する孫の主観的評価が媒介変数としてかかわっていることや（村山，2009），祖父母機能と祖父母と親との関係の良好さが関連していることが指摘されていることから（Attar-Schwartz, Tan, &Buchanan, 2009；杉井，2006），祖父母と自分との関係および祖父母と親（両親）との関係についての項目を設けた。これら 2 項目について，それぞれ「1：よかったとは言えないと思う」から「4：とてもよかったと思う」の 4 件法で回答を求めた。

分析には，IBM SPSS Statistics 28.0 と Amos 28.0 を使用した。

結　果

分析対象者の属性

提出された回答のうち，現在までに祖父母との交流経験が一度もないと回答した者と個人属性に不備のあったデータを除外した 196 名を分析対象者とした。分析対象者の平均年

齢は，18.90±.77 歳で，女性 144 名，男性 49 名，性別無回答者 3 名であった。学年は 1 年生 146 名，2 年生 49 名，4 年生 1 名であった。

影響を受けた祖父母との交流状況

影響を受けた祖父母の回答内訳は，父方祖父が 19 名（9.69％），父方祖母が 41. 名（20.92％），母方祖父が 33 名（16.84％），母方祖母が 103 名（52.55％）であり，母方祖母の割合が最も高かった。影響を受けた祖父母の現在の状況についての回答の内訳は，「元気に暮らしている」が 149 名（76.0％），「元気とは言えないが存命である」が 21 名（10.7％），「現在は亡くなっている」が 26 名（13.3％）で，年齢の内訳は 60 歳代が 16 名（8.16％），70 歳代が 100 名（51.02％），80 歳代が 61 名（31.12％），90 歳代が 10 名（5.10％），わからないが 9 名（4.59％）であった。想起された祖父母は，70 歳代～ 80 歳代が 8 割を占めた。

影響を受けた祖父母との同別居状況は，「同居」が 17 名（8.67％），「別居（30 分圏内）」が 55 名（28.06％），「別居（1 時間以内）」が 18 名（9.18％），「別居（1 時間以上）」が 106 名（54.08％）であり，総じて 9 割以上が別居という結果であった。主なコミュニケーション手段（複数回答可）として各回答選択肢に該当すると回答した割合は，「直接会って話す」が 164 名（83.67％），「電話」が 106 名（54.08％），「メール」が 27 名（27.04％），「手紙」が 7 名（3.57％）であり，8 割以上が対面を主なコミュニケーション手段であった。祖父母との対面交流頻度は，「ほぼ毎日」が 19 名（9.69％），「週 1 ～ 2 回」が 22 名（11.22％），「月 1 ～ 2 回」が 52 名（26.53％），「半年に 1 ～ 2 回」が 54 名（27.55％），「年に 1 ～ 2 回」が 31 名（15.82％）」，「ほとんどない」が 18 名（9.18％）であった。非対面交流頻度は「ほぼ毎日」が 11 名（5.61％），「週 1 ～ 2 回」が 24 名（12.24％），「月 1 ～ 2 回」が 69 名（35.20％），「半年に 1 ～ 2 回」が 30 名（15.31％），「年に 1 ～ 2 回」が 13 名（6.63％）」，「ほとんどない」が 49 名（25.00％）であった。共同行動については，全 4 項目について一次元性を確認するため主成分分析を行った結果，成分負荷量が .68 以上（α=.80）となったため，尺度の一次元性と内的整合性が確認されたと判断した。共同行動の 1 項目あたりの平均値は 2.21±.81 であった。COVID-19 の感染拡大による祖父母との交流の変化では「交流は減った」が 88 名（44.90％），「交流に変化はなかった」が 103 名（52.55％），「交流は増えた」が 3 名（1.53％），未回答が 2 名であり，およそ半数が交流に変化はなかったと回答した。祖父母との会話内容では，「あいさつ程度」が 9 名（4.59％），「世間話程度」が 40 名（20.41％），「一方的に話す／聞く」が 44 名（22.45％），「お互いに話す／相談相手」が 103 名（52.55％）であったとなり，半数が双方向による会話を行っていた。

各尺度の検討と信頼性

祖父母機能の因子構造の検討　祖父母機能の因子構造を確認するため，確認的因子分析を行ったところ，CFI=.80，RMSEA=.08，AIC=791.84 とあてはまりが悪かった。そこで探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行い，因子負荷量が .40 未満の 5 項目と二重負荷が .40 以上であった 1 項目の計 6 項目を削除して因子分析を繰り返した結果，4 因子が抽出された（Table 1）。確認的因子分析を行ったところ，CFI=.90，RMSEA=.07，AIC=429.81 と AIC 値が低くなったことから最終的に 4 因子構造を採用することとした。第 1 因子は項目の多くが原典である田畑他（1996）の存在受容機能項目によって構成され

ていたことから，「存在受容機能」と命名した。第 2 因子は，田畑他（1996）の時間的展望促進機能の項目のうち，将来や未来への展望に関わる内容から構成されていたため「時間的展望促進機能（未来）」とした。第 3 因子は田畑他（1996）の「日常的・日常的・情緒的援助機能」のうち金銭的援助や親代わりの援助といった道具的サポートに関わる項目を除く項目群から構成されていたため，原典同様「日常的・情緒的援助機能」とした。第 4 因子は，田畑他（1996）の時間的展望機能の 2 項目と世代継承性促進機能の 1 項目で構成されていたが，祖父母の若い頃やそれまでの人生の経験・知識について語り伝える内容であり，時間的展望促進機能のうち祖父母や親の過去に関わる項目から構成されていると判断されたため，「時間的展望促進機能（過去）」と命名した。各下位尺度のクロンバックの α 係数は，存在受容機能が .86，時間的展望促進機能（未来）は .76，日常的・情緒的援助機能は .75，時間的展望促進機能（過去）は .72 となり，いずれも一定の内的整合性が確認された。

自己開示の因子構造の検討　祖父母から孫への自己開示と自分から祖父母への自己開示について，各変数の 12 項目についてそれぞれ因子分析（主因子法）を実施し因子構造を検討した。初期の固有値が 1 以上で，因子負荷量が .40 以上を基準として分析した結果，解釈可能性からいずれも 1 因子構造が妥当であると判断された。祖父母から孫への自己開示は α=.90，自分から祖父母への自己開示は α = .92 となり十分な内的整合性が確認された。

各変数の記述統計

祖父母機能の各下位尺度，祖父母からの自己開示，祖父母への自己開示，共同行動，祖父母との関係，祖父母と親との関係の記述統計と相関係数を Table 2 に示した。その結果，祖父母からの自己開示はすべての祖父母機能と中程度の正の相関，自分から祖父母への自己開示は存在受容機能と時間的展望促進機能（過去）と強い正の相関，時間的展望促進機能（未来）と日常的・情緒的援助機能は中程度の正の相関を示した。共同行動は 4 つの祖父母機能と弱い正の相関を示した。祖父母と自分との関係は存在受容機能と日常的・情緒的援助機能との間に中程度の正の相関，時間的展望促進機能（未来）と時間的展望促進機能（過去）との間に弱い正の相関がみられた。祖父母と親との関係は，日常的・情緒的援助機能との間にのみ中程度の正の相関を示し，その他の 3 つの祖父母機能とは弱い正の相関がみられた。

Table 1　祖父母機能の探索的因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

項目番号	項目内容	田畑他(1996)の因子(注)	因子負荷量 F1	F2	F3	F4
F1	存在受容機能（α＝.86）					
13	悩みや，もめごとがあったときなど，祖父(祖母)が何もしなくてもいるだけで，心の支えになると思う	存在	**.79**	.05	-.06	-.05
28	つらいことがあるとき，祖父(祖母)を思うと，気持ちがなぐさめられることがある	存在	**.77**	.10	-.01	-.15
22	自分ではどうにもならなくなったとき，最後に頼りになるのは祖父(祖母)だなあと思う	存在	**.69**	.12	-.13	.03
26	祖父(祖母)は，わたしが悩んでいるときなど，必要なときにアドバイスしてくれる	存在	**.62**	-.13	.03	.28
27	親には言えないことでも祖父(祖母)には話せることがある	存在	**.59**	.06	-.06	-.02
10	祖父(祖母)はわたしの親とぎくしゃくしたときなど，間をとりもってくれる	存在	**.59**	-.10	.09	.08
16	祖父(祖母)がいるだけでなんとなく安心できる気がする	存在	**.53**	.25	.09	-.03
8	親はわたしを叱っても，祖父(祖母)は大目にみてくれることがある	援助	**.47**	-.13	.14	-.03
F2	時間的展望機能(未来)（α＝.76）					
17	祖父(祖母)の姿から，自分のこれからの生き方を前向きに考えることがある	時間	.05	**.73**	.16	-.02
6	祖父(祖母)の姿から，自分が年をとったときどうなりたいか想像することがある	時間	.00	**.64**	.13	-.03
11	祖父(祖母)の姿から，人の一生について，積極的に考えてみることがある	時間	.15	**.63**	-.15	.15
12	祖父(祖母)の姿から，人の死について，考えてみることがある	時間	-.07	**.59**	-.09	.04
F3	日常的・情緒的援助機能（α＝.75）					
15	祖父(祖母)は，わたしに興味や関心をもっていてくれる	援助	-.16	.09	**.88**	.01
21	祖父(祖母)は何があっても，わたしのことを見捨てないと思う	存在	.06	.04	**.80**	-.05
2	祖父(祖母)は，わたしのからだのぐあいを気づかってくれる	援助	.01	-.07	**.50**	.14
3	祖父(祖母)はわたしの気持ちを理解しようとしてくれる	援助	.33	-.14	**.48**	.02
F4	時間的展望機能(過去)（α＝.72）					
7	祖父(祖母)は若い頃の，社会の様子や暮らしについて話してくれる	時間	-.08	.07	-.05	**.90**
15	祖父(祖母)は，昔からのしきたりや人生の経験を教えてくれる	時間	-.09	.18	.09	**.56**
21	祖父(祖母)はわたしの知らない親のことを教えてくれる	世代	.20	-.14	.14	**.46**
	因子間相関	F2	.58			
		F3	.54	.44		
		F4	.53	.39	.47	

注）田畑・星野・佐藤他(1996)の存在受容機能を「存在」，時間的展望機能を「時間」，日常的・情緒的援助機能を「援助」，世代継承性促進機能を「世代」と略して記載した。

Table 2　各変数の記述統計と変数間の相関係数およびその信頼区間

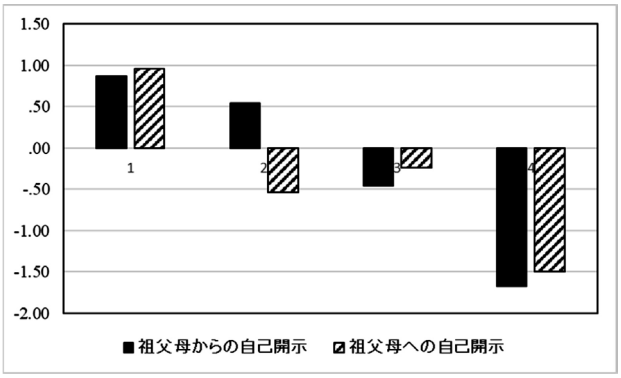
変数		1	2	3	4	5	6	7	8	*M*	*SD*
1 存在受容機能		—								2.23	(.55)
2 時間的展望促進機能(未来)	*r*	.56 **	—							2.47	(.61)
	CI	[.46 .65]									
3 日常的・情緒的援助機能	*r*	.54 **	.39 **	—						2.80	(.39)
	CI	[.43 .63]	[.26 .50]								
4 時間的展望促進機能(過去)	*r*	.50 **	.40 **	.46 **	—					2.53	(.61)
	CI	[.39 .60]	[.28 .51]	[.34 .56]							
5 祖父母からの自己開示	*r*	.52 **	.47 **	.40 **	.57 **	—				2.57	(.68)
	CI	[.41 .62]	[.35 .57]	[.28 .51]	[.47 .66]						
6 祖父母への自己開示	*r*	.61 **	.44 **	.38 **	.67 **	.77 **	—			2.72	(.74)
	CI	[.51 .69]	[.32 .55]	[.25 .49]	[.58 .74]	[.71 .82]					
7 共同行動	*r*	.36 **	.28 **	.26 **	.33 **	.43 **	.47 **	—		2.21	(.81)
	CI	[.23 .48]	[.15 .40]	[.12 .39]	[.19 .45]	[.31 .54]	[.35 .57]				
8 祖父母と自分との関係	*r*	.54 **	.37 **	.53 **	.30 **	.23 **	.46 **	.30 **	—	3.74	(.53)
	CI	[.43 .63]	[.24 .49]	[.42 .62]	[.17 .42]	[.09 .36]	[.34 .56]	[.17 .42]			
9 祖父母と親との関係	*r*	.39 **	.27 **	.44 **	.26 **	.24 **	.31 **	.26 **	.49 **	3.51	(.81)
	CI	[.26 .50]	[.14 .40]	[.32 .55]	[.12 .39]	[.10 .37]	[.18 .43]	[.12 .39]	[.38 .59]		

** $p < .01$

自己開示プロフィールの抽出

祖父母からの自己開示と祖父母への自己開示の状態を類型化するために，祖父母からの自己開示と祖父母への自己開示の標準化得点を用いて階層的クラスター分析（最遠隣法）を行った。3 から 5 クラスターを抽出し，自己開示得点のプロフィールに特徴があり，解釈可能性のある 4 クラスターを採用した（Figure1）。第 1 クラスターは，祖父母からの自己開示と祖父母への自己開示のいずれの自己開示得点も高いことから「両高群（*N*=76）」，第 2 クラスターは，祖父母からの自己開示得点が高く祖父母への自己開示得点が低いことから「祖父母開示高群（*N*=24）」，第 3 クラスターは祖父母からの自己開示が低いことから「祖父母開示低群（*N*=67）」，第 4 クラスターは他の群と比較して最も両自己開示得点が低かったことから「両低群（*N*=29）」と命名した。

Figure 1　各クラスターの自己開示得点のプロフィール



群ごとの祖父母との交流の特徴

各群の祖父母との交流の特徴を検討するため，性別（回答しないを除外），同別居状況，対面接触頻度，非対面接触頻度についてそれぞれ X^2検定を行った結果，性別，同別居状況，対面接触頻度では群間の有意な偏りは認められなかったが（それぞれ X^2 (3)=5.22，*ns* ;X^2 (9)=7.52，*ns* ; X^2 (15)=14.25，*ns*），非対面接触頻度では群間に有意な偏りが認められた（X^2 (15)=52.48，*p*<.01, *V*=.30）。残差分析を行ったところ，両高群では「ほぼ毎日」が有意に多く（*p*<.05），両低群では「月 1 ～ 2 回」が有意に少なく「半年に 1 ～ 2 回」「ほとんどない」が有意に多かった（*ps*<.05）。また，COVID-19 の感染状況の影響では群間の有意差は認められなかった（X^2 (9)=8.71，*ns*）。会話内容では有意な群間差が認められ（X^2 (15)=43.16，*p*<.01, *V*=.27），残差分析の結果，両高群では「お互いに話す／相談相手」が多く（*p*<.01），「一方的に話す／聞く」と「世間話程度」が少なかった（*ps*<.05）。一方両低群では「お互いに話す／相談相手」が有意に少なく（*p*<.01），「世間話程度」と「あいさつ程度」が有意に多かった（*ps*<.01）。各群の共同行動の特徴を検討するため一元配置分散分析を行ったところ，クラスターの主効果が有意であった（F（3）=11.06, p ＜ .01, η_p^2=.15）。多重比較の結果，両高群が，祖父母開示低群と両低群よりも共同行動得点が有意に高いことが示された（*ps* ＜ .01）。なお，影響を受けた祖父母の続柄によって群間に偏りがあるか検討したところ，有意差は認められなかった（X^2 (9)=9.31，*ns*）。群間に有

意差が認められた非対面接触頻度と会話内容の各群の人数比ならびに共同行動の記述統計のみ Table3 に示した。

Table 3　各群の非対面接触頻度・会話内容の度数と共同行動の記述統計ならびに統計値

		クラスター1 両高群	クラスター2 祖父母開示高群	クラスター3 祖父母開示低群	クラスター4 両低群	統計値
		N=76	N=24	N=67	N=29	
非対面接触頻度						
ほぼ毎日		10	0	1	0	X^2 (15)=52.48，p<.01
週1～2回		11	3	9	1	
月1～2回		31	8	26	4	
半年に1～2回		15	3	10	2	
年に1～2回		2	1	4	6	
ほとんどない		7	9	17	16	
会話内容						
あいさつ程度		1	0	3	5	X^2 (15)=43.16，p<.01
世間話程度		8	5	15	12	
一方的に話す・聞く		11	5	20	8	
お互いに話す・相談相手		56	14	29	4	
共同行動	M	2.57	2.14	2.09	1.66	F(3)=11.06，p < .01
	(SD)	(.82)	(.72)	(.73)	(.61)	

祖父母機能の群間比較

次に各クラスターの祖父母機能の下位尺度得点を比較した。祖父母と自分との関係と祖父母と親との関係は祖父母機能との間に弱いあるいは中程度の相関が認められたため（それぞれ rs=.30-54, ps<.01; rs=.26-44, ps<.01），これら 2 変数を共変量として投入し，クラスターを独立変数，祖父母機能の各下位尺度得点を従属変数とする共分散分析を行った。分析の結果，祖父母と自分および親との関係を統制しても，すべての機能においてクラスターの主効果が有意であった（存在受容機能：F（3）=19.55, p < .01, η_p^2=.41；時間的展望促進機能（未来）：F（3）=9.39, p < .01, η_p^2=.22; 日常的・情緒的援助機能：F（3）=5.76, p < .01, η_p^2=.25; 時間的展望促進機能（過去）: F（3）=39.23, p < .01, η_p^2=.44）。クラスターの主効果について多重比較を行った結果，存在受容機能では，両高群が他の 3 群よりも高く（ps < .01），祖父母開示低群よりも両低群の方が最も低かった（ps < .05）。時間的展望促進機能（未来）は，両高群よりも祖父母開示低群・両低群が高く（ps < .01），祖父母開示高群が両低群よりも高かった（ps < .05）。日常的・情緒的援助機能は，両高群と祖父母開示低群がそれぞれ両低群よりも高かった（p < .01; p < .05）。時間的展望促進機能（過去）では，両高群が祖父母開示低群と両低群よりも高く，また祖父母開示高群と祖父母開示低群がそれぞれ両低群よりも高かった（ps < .01）。

Table 4　群ごとの祖父母との関係統制後の祖父母機能得点

		クラスター1 両高群	クラスター2 祖父母開示高群	クラスター3 祖父母開示低群	クラスター4 両低群	F クラスターの主効果	F 共変量 祖父母と自分の関係	F 共変量 祖父母と親の関係	多重比較 (p<.05)
		N=76	N=24	N=67	N=29				
祖父母機能									
存在受容機能	M	2.59	2.11	2.10	1.68	19.55**	27.51**	3.60	1>2・3・4, 3>4
	(SD)	(.35)	(.50)	(.49)	(.54)				
時間的展望促進機能（未来）	M	2.77	2.52	2.29	2.05	9.39**	7.18**	1.56	1>3・4, 2>4
	(SD)	(.38)	(.57)	(.65)	(.67)				
日常的・情緒的援助機能	M	2.93	2.84	2.80	2.40	5.76**	23.61**	8.34**	1>4, 3>4
	(SD)	(.18)	(.33)	(.29)	(.69)				
時間的展望促進機能（過去）	M	2.85	2.83	2.43	1.68	39.23**	.06	1.08	1>3・4, 2>4, 3>4
	(SD)	(.31)	(.28)	(.58)	(.62)				

** p<.01

考　察

青年期の孫にとっての祖父母機能

本研究では，祖父母機能として存在受容機能，時間的展望促進機能の（未来）と（過去），日常的・情緒的援助機能が抽出され，田畑他（1996）の 4 機能のうち世代継承性促進機能を除く 3 つ因子が対応関係を持つ因子として再現された。存在受容機能は，祖父母が孫にとって保護的で安心につながるような機能を意味するが（田畑他，1996），前原他（2000）の「安全基地機能」や森下・上田（2016）の「心の支え」でも存在受容機能に類似した内容が見出されており，青年期の孫にとって認知されやすい祖父母機能のひとつといえる。時間的展望促進機能に関しては，本研究では（未来）と（過去）の 2 因子として再現され，（未来）因子が孫にとって将来の自分の人生や一生を考える機会が提供される「孫の未来展望の促進（田畑他，1996）」にあたり，（過去）因子が祖父母から歴史や人生経験といった過去について学ぶ機会が提供される「歴史の伝達（田畑他，1996）」に相当すると考えられる。大学生の孫はそれまでの年代と比較してライフコースの視点から祖父母の老いや人生，世代継承についてより考えるようになるという（杉井，2006）。時間的展望は，ある時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体（Lewin, 1951）であり，過去・現在・未来の時間軸に区別して検討されることが多いが，本研究でも時間軸が異なる因子としてわかれた。特に青年にとっては現在や未来への肯定的な展望がアイデンティティ形成に関連するとの報告もあり（石川，2018），福江他（2020）や森下・上田（2006）でも祖父母による時間的展望に関する機能が青年の心理的発達に寄与することから，祖父母ならではの有益な機能の一つといえるだろう。日常的・情緒的援助機能は，孫への興味関心や理解，気遣いによって祖父母に支えてもらっているという認知を意味する。祖父母への孫のケア役割としては孫の年齢が幼い場合は養育や家事，金銭的援助，しつけなどの社会化教育などへのニーズが高まるが，孫の成長とともにそれらは変化し，青年期の孫にとっては情緒的なサポートが祖父母役割の一つとして機能すると考えられる。一方，本研究では祖父母の姿から孫が祖父母や家族との類似性や連続性を認識する「世代継承性促進機能（田畑他，1996）」は抽出されなかった。一般に世代継承性は「世代性（generativity）」ともよばれ，Erikson（1950）が中年期（第 7 段階）の心理社会的課題として提唱した「次世代を教え導くことへの関心」を示す概念である。近年では，中年期に限らず，高齢期においても重要な発達課題とされ（Cheng, 2009），概念整理や尺度の整備がおこなわれている（村山・小林・倉岡他，2022；田渕，2021）。村山他（2022）が

開発した高齢者対象の世代継承性尺度（JGS-R）には，「自分の人生について若い人たちに語ることで，彼らを支援する」「自分自身の経験を若い人たちに語る」といった世代継承的行動や，「自分の経験を他の人と分かち合いたい」の世代継承的関心が含まれている。これらは，時間的展望促進機能（過去）と一部関連した内容を含んでおり，高齢者視点での世代継承性が，受領者である孫にとっては歴史の伝達としての時間的展望促進機能として現れたと考えられる。

自己開示のプロフィールと祖父母との交流の特徴，祖父母機能との関連

祖父母への自己開示と祖父母からの自己開示のクラスター分析の結果，両高群，祖父母開示高群，祖父母開示低群，両低群が抽出された。孫と祖父母の自己開示のパターンと同別居状況や対面接触頻度，祖父母の続柄との関わりは認められず，青年期の孫と祖父母のコミュニケーションは物理的環境や対面交流の頻度に左右されないことが示された。これは，既述した Sciplino & Kinshott（2019）や Geurts, et. al.（2011）らの結果を支持するものである。大学生になるとそれ以前までの累積された祖父母との交流経験や関係性を基礎としながら，コミュニケーションの質も維持させていくと考えられる。

自己開示のプロフィール分析では，両高群は電話やメール等の対面しない交流やお互いに話をしたり一緒に行動する割合が高く，祖父母との交流が質・量ともに良好な特徴を示していた。一方両低群では，非対面での交流や一緒に行動する頻度が低く，会話も世間話やあいさつ程度といった表面的なコミュニケーションに留まっていた。祖父母開示低群は，両高群に比べて共同行動する頻度が少なく，コミュニケーションは維持されつつも一緒に行動する機会が少なかった。祖父母開示高群は他の群と比較して特徴的な交流状況は認められなかった。また，家族への自己開示度は性差が報告されており，女性の方が男性よりも高いことが知られている（e.g., 榎本，1997）が，今回は自己開示パターンに性差の偏りは見られなかった。前原他（2000）や杉井（2006）は，祖父母との親密な関係は祖父母の続柄と孫の性別によって異なることを報告している。本研究では影響を受けた祖父母を一人選好する方法を用いているため，最も関係性が深い続柄の祖父母との組み合わせのみに焦点があてられたことが影響していると考えられる。

孫と祖父母の自己開示パターンと祖父母機能の関連について検討した結果，祖父母と自分との関係，祖父母と親との関係を統制しても，自己開示の主効果がいずれの機能においても有意であり，孫と祖父母の双方向によるコミュニケーションの深さが祖父母機能において重要であることが示された。田中他（2022）では大学生の孫から祖父母への自己開示の頻度が存在受容機能と時間的展望機能に寄与を示したが，孫からの一方的な自己開示だけでなく，双方の相互作用を踏まえた検討の必要性があるといえる。さらに孫にとっての心のより処としての存在受容機能では，両者の自己開示の高さだけでなく，祖父母からの開示が低い群も両低群に比べて高くなっていた。お互いに話し合うという関係性はもとより，祖父母から孫への語りかけや自己開示が少なくても，孫が自分の話をして祖父母に聞いてもらうことで，孫にとっての安心感や被受容感につながることが明らかとなった。一方，孫の未来展望を促進する時間的展望機能（未来）では，祖父母からの開示が高い群の方が両低群に比べて高かった。孫の未来展望を促すためには，祖父母からの語りが重要であることが示された。日常的・情緒的援助機能では，両高群と祖父母開示低群がそれぞれ

両低群よりも高くなっており，祖父母からの自己開示よりも孫から祖父母への自己開示の維持の方が関連することが示された。またこの機能のみ，祖父母と親との関係も有意な関係が認められ，親と祖父母との関係の良好さが援助機能に一定の影響をもたらす結果となった。野中・奥野（2021）は，両親と祖父母の心理的距離が孫と祖父母の心理的距離を媒介して、孫と祖父母の関係評価（存在受容機能，日常的・情緒的援助機能，世代継承性促進機能）に影響することを報告しており，本研究の結果はそれを支持するものとなった。歴史の伝達を意味する時間的展望（過去）では，両低群が最も低く，両高群と祖父母開示高群の間に差は認められなかった。過去の伝達においては，祖父母からの開示が重要であり，さらにそれらは孫自身や親と祖父母との関係性の良好さと関連しないことが示された。祖父母にとっては孫との関係性の質に関わらず，様々なことを語ることで，過去の伝達が促進され祖父母機能が高まることが示唆された。一方，高齢者の世代性という枠組みから，高齢者と初対面の若年者の相互作用について検討した田渕（2021）は，高齢者による経験にもとづくアドバイスや教えは，初対面の若年者にとっていつもポジティブに働くわけではないという。実験場面において，高齢者の語りに対して若年者のポジティブな反応見られた場合に世代性が高まり，受け手の反応によって世代性得点が異なることが報告されている（田渕・三浦，2014）。この現象を祖父母と孫関係にそのまま適用することはできないが，祖父母機能を高めるような祖父母と孫の相互作用のプロセスについても検証する必要があるだろう。

本研究の限界と課題

本研究では，青年期の孫と祖父母の自己開示のパターンの特徴から，祖父母への自己開示と祖父母からの自己開示という互いのコミュニケーションが祖父母機能とより関連することが示された。しかしながら，本研究にはさらなる検討の余地が残されている。本研究では孫側の視点から孫が祖父母とのコミュニケーションをどのように認知するかといった観点での検討に留まる。さらに，自己開示の両者の量的なバランスについては検討することができたが，孫からの自己開示と祖父母からの自己開示項目はいずれも 1 因子構造となったため，自己開示の深さやレベルについては検討することができなかった。自己開示の深さや広がりといった多様な視点から，実際の孫と祖父母のコミュニケーション場面や相互作用やその過程について今後検討していくべきであろう。また本研究では世代継承性促進機能について因子が再現されず，検討することができなかった。この機能は，前原他（2000）の語り部・伝統文化伝承機能や，福江他（2019）での世代的つながりなどでは再現されている。分析対象者の大多数を大学 1，2 年生を占めているが，その約 4 割が COVID-19 の影響で祖父母との交流が減少したと回答していた。COVID-19 の感染拡大により 2020 年以降，日本では緊急事態宣言や蔓延防止措置などが発出され，社会的に高齢者との交流が抑制されることとなった。世代継承について考え始めるのが大学生以降（杉井，2006）とされているが，本研究で世代継承性促進機能が再現されなかった背景には，こうした青年期における祖父母との交流が抑制されるという社会的文脈が影響しているかもしれない。しかしこれは推測の域を出ないため，今後検討していく必要があるだろう。一方で，本研究で用いた祖父母関係評価尺度［孫版］（田畑他，1996）では因子構造の再現性について複数の研究で課題が見られている（福江他，2019；野中・奥野，2021）。田

畑他（1996）は，中学校から大学生まで幅広い年代を対象に祖父母機能の構造を明らかにしているが，諏澤（2013）は孫と祖父母との関係は孫の成長に伴い変化することを指摘している。青年期後期にあたる大学生では同じ祖父母の行動や態度であっても孫側の発達段階において認知される機能的側面が変化している可能性も否めない。さらに祖父母との関わりが孫にとってポジティブな機能ばかりを有すわけではなく，田畑他（1996）も葛藤や否定といったネガティブな側面も考慮する必要があると指摘している。これらの課題を踏まえながら，改めて祖父母機能の測定方法や尺度構成や項目内容について議論・検討していく必要があるかもしれない。

付記

本研究は 2022 年度文教大学大学院共同研究費の助成を受けて実施されました。調査にご協力いただいた短期大学生・大学生の皆様，調査実施にご配慮いただきました先生方に深く感謝申し上げます。

引用文献

Attar-Schwartz, S., Tan, JP., & Buchanan, A. (2009) Adolescents' perspectives on relationships with grandparents: The contribution of adolescent, grandparent, and parent-grandparent relationship variables. Children and Youth Services Review, **31**, 1057-1066.

Buchanan, A., & Rotkirch, A. (2018) Twenty-first century grandparents: global perspectives on changing roles and consequences. Contemporary Social Science, **13**, 131-144.

Cheng, T. (2009) Generativity in later life: perceived respect from younger generations as a determinant of goal disengagement and psychological well-being. Journal of Gerontology: Psychological Sciences, **64**, 45-54.

Eisenberg, A. R. (1988) Grandchildren's perspectives on relationships with grandparents:The influence of gender across generations. Sex Roles, **19**, 205-217.

榎本博明（1983）対人関係を規定する要因としての自己開示研究　心理学評論，**26**, 148-164.

榎本博明（1987）青年期（大学生）における自己開示性とその性差について　心理学研究，**58**, 91-97.

Erikson, E. H. (1950) Childhood and society. W. W. Norton & Company, New York（エリクソン，E. H.・仁科弥生（訳）（1997）幼児期と社会 I　みすず書房）

福江里美・荒井佐和子・福岡欣治（2019）大学生の孫からみた祖父母の機能と祖父母イメージ　川崎医療福祉学会誌，**29**, 191-200.

福江里美・福岡欣治・荒井佐和子（2020）過去の祖父母機能が大学生の心理的発達と高齢者イメージに及ぼす影響　川崎医療福祉学会誌，**30**, 95-107.

Geurts, T., Van Tilburg, T. G., & Poortman, A, R. (2011) The grandparent-grandchild relationship in childhood and adulthood: A matter of continuation?　Personal Relationships, **19**, 267-278.

石川僚（2018）青年の時間的展望とアイデンティティ形成過程の 5 側面との関連　心理学研究，**89**, 119-129.

石盛真徳・小杉考司・清水裕士・藤澤隆史・渡邊太・武藤杏里（2017）マルチレベル構造

方程式モデリングによる夫婦ペアデータへのアプローチ：中年期夫婦のあり方が夫婦関係満足度，家族の安定性，および主観的幸福に及ぼす影響　実験社会心理学研究，**56**, 153-164.

伊藤裕子・相良順子（2012）愛情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討――中高年期夫婦を対象に――　心理学研究　**83**, 211-216.

Kivnick, H. Q. (1983) Dimensions of grandparenthood meaning: Deductive conceptualization and empirical derivation. Journal of personality and social psychology, **44**, 1056-1068.

久保真人（1993）行動特性からみた関係の親密さ　実験社会心理学研究，**33**, 1-10.

Lewin, K. (1951) Field theory in social science. New York: Harper & Brothers Publishers.

前原武子・金城育子・稲谷ふみ枝（2000）続柄の違う祖父母と孫の関係　教育心理学研究，**48**, 120-127

村山陽（2009）高齢者との交流が子どもに及ぼす影響　社会心理学研究，**25**, 1-10.

村山幸子・小林江里香・倉岡正高・野中久美子・安永正史・田中元基・根本裕太・松永博子・村 陽・村山洋史・藤原佳典（2022）改訂版世代継承性尺度（JGS-R）の作成と信頼性・妥当性の検討　パーソナリティ研究，**30**, 151-160.

中里和弘（2006）青年期における祖父母との死別に関する研究（第 2 報）：死別反応とその関連要因（性格特性，故人の生前の機能）についての検討　生老病死の行動科学，**11**, 21-29.

丹羽空・丸野俊一（2010）自己開示の深さを測定する尺度の開発　パーソナリティ研究，**18**, 196-209.

森下正康・上田佳乃（2016）祖父母との関係が女子大学生の自尊感情を自己受容に与える影響　京都女子大学教育学部紀要（12），135-144.

野中響子・奥野雅子（2022）孫・祖父母関係と家族機能の関連　家族心理学研究，**35**, 28-40.

大谷英子・松木光子（1995）老人イメージと形成要因に関する調査研究（1）大学生の老人イメージと生活経験の関連　日本看護研究学会雑誌 **18**, 25-38.

Sciplino, C., & Kinshott, M. (2019) Adult grandchildren's perspectives on the grandparent-grandchild relationship from childhood to adulthood. Educational Gerontology, **45**, 134-145.

柴田雄企（2015）孫からみた祖父母：祖父母との交流と祖父母機能　大分県立芸術文化短期大学研究紀要，**53**, 1-9.

菅沼真樹（1997）老年期の自己開示と自尊感情 教育心理学研究，**45**, 378-387.

杉井潤子（2006）祖父母と孫との世代間関係―孫の年齢による関係性の変化―　奈良教育大学紀要（人文・社会科学），**55**, 177-190.

諏澤宏恵（2013）日米の実証研究にみる祖父母―孫関係の発達的変代：祖父母・親・孫のライフステージを単位とした検討　人間文代研究科年報，**28**, 121-131.

田畑治・星野和実・佐藤朗子・坪井さとみ・橋本剛・遠藤英俊（1996）青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成　心理学研究，**67**, 375-381.

田渕恵（2021）高齢期の世代性（generativity）と世代間相互作用　老年社会科学，**43**, 298-303.

田渕恵・三浦麻子（2014）高齢者の利他的行動としての「語り」に与える世代間相互作用

の影響：実験場面を用いた検討　発達心理学研究，**25**, 251-259.
田中真理・鎌田晶子・秋山美栄子（2022）青年期における現在および過去の祖父母との交流と祖父母機能　鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報，**53**, 19-29.
渡辺由己（2008）大学生の孫による，祖父母との関わりに関する研究　吉備国際大学社会福祉学部研究紀要，**13**, 115-122.